

会計大学院協会ニュース

No.20 2015

会計大学院協会創立10周年記念
公開シンポジウム特集





C O N T E N T S

3

世界で求められる会計人を養成するために

会計大学院協会理事長 高田 敏文

4

会計大学院協会創立10周年記念 公開シンポジウム

5

第一部 基調講演

「専門職大学院のこれまでの歩みと今後の展望」

文部科学省高等教育局 専門教育課長 牛尾 則文

6

第二部 特別講演

「国際対応に不可欠な会計専門職教育」

中央大学大学院 経営戦略研究科教授 藤沼 亜起

7

第三部 パネル討論会 [会計大学院修了生討論会]

「次代を担う会計大学院修了生の活躍の姿」

11

会計大学院協会活動状況(2014.12~2015.4)

世界で求められる会計人を養成するために

会計大学院協会理事長 **高田 敏文**
Toshifumi Takada



専門職大学院としての会計大学院は最初に全国の10大学に設立されて以来今年で11年目に入りました。会計大学院協会は会計大学院が10大学に設立された次年度に設立され、設立10周年記念セレモニーを先日開催しました。この間、多くの方々、機関のご協力を得て、その活動を実施して参りました。会計大学院協会を代表して、ここに心から御礼申し上げます。会計大学院協会は、会計教育のさらなる発展のために各種の活動を実施してきましたが、特筆すべき活動は、分野別第三者評価機関である「会計大学院評価機構」の認証申請と設立、コアカリキュラムの検討と提案、海外の会計職業団体の教育システムの調査等です。こうした活動の成果は、各会計大学院の教育課程の編成に少なからず貢献したと認識しています。

学校教育法により専門職大学院には5年に一度、文部科学大臣によって認証された第三者評価機関による評価が義務付けられています。会計大学院協会にとって、この評価機関を設立することが最初のもっとも重要な仕事でした。この目的のために協会の中に「第三者評価機関設立準備委員会」を設置し、全会計大学院の代表者が委員となって月に一度の会議を開催し、評価基準の策定、評価手続、評価機関の設置等を一年間にわたり検討し、その結果をもって文部科学省に認証申請しました。これら作業はいずれも苦勞の連続でしたが、委員全員のご協力により文部科学大臣の認証を得ることができました。会計大学院評価機構は、会計大学院の協力により第三者評価を実施すること、つまり各会計大学院から評価員を機構に派遣していただき、評価員が評価基準に照らして評価を実施することとする、いわゆる「ピアレビュー」方式を採用し、評価料を低く抑えることにしました。また、恒常的な事務局を維持することが経費的に厳しいことから、日本公認会計士協会のご協力を得て事務局スペースを無料でお借りすることができました。

会計大学院はその教育の質を高い水準で維持することが極めて重要であり、分野別第三者評価はその点で大切な役割を果たします。「会計大学院評価機構」は10年の節目を経過しましたので、評価基準の改訂、評価体制の見直し等が必要であると判断し、改めて認証申請し直すことを会計大学院協会理事委員会議で決定し、先日、理事長が文部科学省を訪問し、その旨を通知し、どのように認証を進めるのかについてアドバイスを受けてきました。新しく設置される評価機関もピアレビュー方式を踏襲することとしています。

会計の教育課程は、経済・経営・商学における会計以外の分野と大きく異なる点があります。その違いとは、会計教育には会計の技術的枠組みとしての簿記と原価計算の教育が必須であることです。簿記と原価計算は会計技術ですから、学生はその修得のためには何度も繰り返しトレーニングしてその技術を覚え込まなければなりません。こうした技術的知識の基盤があることを前提として、財務会計、管理会計、監査の理論(基準と概念構造)が構築されています。会計大学院協会で「会計のコアカリキュラム」とは何であるのかの調査・検討を開始したときに最初に確認したことは、簿記・原価計算という会計の

技術基盤を会計教育課程にどのように位置付けるのかでした。

コアカリキュラム検討委員会は、会計の技術基盤である簿記・原価計算は、会計の「文法」あるいは「リテラシー」であり、コアカリキュラムの基礎を形成するものであるという理解を示しました。この点は、他の学問分野でも具体的なあり方に違いはあるものの当該学問にはその基盤となる知識体系が存在している点で共通しています。かつて近代統計学の祖の一人であるKarl PearsonがThe Grammar of Scienceという本を著し、統計学はすべての科学の文法であると主張しました。まことに正鵠を射た言明であると思います。また、医学教育の分野では、そもそも医師として必要な基盤的な知識とは何であるのかから議論が始められています。

会計のコアカリキュラムは、(1)技術的知識体系(簿記と原価計算)、(2)基礎理論(財務会計、管理会計、監査)、そして(3)会計人として社会から要請される知識(IFRS、会計職業倫理、監査情報技術等)の三層構造で構成されるという考え方が、『コアカリキュラム検討委員会報告書』で示されました。明治時代初期に福沢諭吉と岩崎彌太郎に代表される人々が簿記と原価計算を日本に導入することに尽力したことは、歴史的な事実として私たち会計教育に携わる者は忘れてはなりません。このことの結果として明治20年代には所得課税が可能となり、近代国家の財政的基盤と近代産業が形成されました。また、戦後はGHQの指令によりわが国にアメリカの公認会計士制度と財務開示制度が持ち込まれました。このことにより証券市場に正しい財務報告が行われ、資本の乏しかった戦後日本の産業に世界から資金が投入され、戦後日本の経済的復興に大きく貢献しました。

翻って私たちは今会計教育に関して何をしなければならぬのでしょうか。私は昨年来アジア、アフリカの多くの国々を訪問して会計教育の話をしてきました。訪問した国々で共通して求められたことは、「ぜひ日本の会社にわが国に進出してもらいたい」、「日本の産業技術をわが国の発展のために使わせてもらいたい」という日本待望論でした。日本の産業に対する信頼、期待がかくも大きいことに私は驚くと共に誇らしく思いましたが、それならば若い人々を日本に送り、日本の会計報告制度や社会制度を勉強してもらいたいと申し上げました。もちろん、私は具体的な教育プログラムも同時に提案しました。日本の会計報告制度は金融商品取引法の財務開示制度、会社法の確定決算制度、法人税法の税務申告制度の3つの制度がお互いに補完し合いながら形成されています。アジア、アフリカ諸国の若者には、日本の会計報告制度を学び、会計インフラをそれぞれの国に持ち帰ってもらいたいと考えています。

わが国の会計大学院は、世界で求められる会計人を養成するために日本が誇ることでできる教育機関です。明治初期以来150年かけて形成してきた会計インフラの教育を実践し、世界で求められる会計人を養成することが会計大学院に求められています。このことを私たち会計大学院において会計教育に携わる者の使命として参りますので、皆様のご理解とご支援を引き続きお願い申し上げます。

[会計大学院協会主催]

会計大学院協会創立10周年記念 公開シンポジウム

国際対応に不可欠な会計専門職教育

【開催日】 2015年1月31日(土) 14:30~17:40

【開催場所】 青山学院大学 青山キャンパス 17号館 17512教室

【プログラム】

■ 第一部 基調講演

専門職大学院のこれまでの歩みと今後の展望

文部科学省高等教育局 専門教育課長 牛尾 則文

■ 第二部 特別講演

国際対応に不可欠な会計専門職教育

中央大学大学院 経営戦略研究科教授 藤沼 亜起

■ 第三部 パネル討論会 [会計大学院修了生討論会]

次代を担う会計大学院修了生の活躍の姿

パネリスト

青山学院大学	中村 義則 (企業派遣)
関西大学	北本 邦明 (一般企業就職)
関西学院大学	越桐 一統 (社会人修了生)
熊本学園大学	中崎 敏弘 (税理士)
北海道大学	大坪 史尚 (公認会計士 [試験合格者])
明治大学	黒沢 健吾 (一般企業就職)
早稲田大学	平井 健之 (公認会計士)

コーディネータ

会計大学院協会相談役 八田 進二

※ご登壇者の所属・肩書は、登壇当時のものです。

第一部 基調講演

専門職大学院のこれまでの歩みと今後の展望

文部科学省高等教育局専門教育課長 **牛尾 則文**
Norifumi Ushio

文部科学省高等教育局で専門教育課長をしております牛尾と申します。会計大学院協会が10周年を迎えられますことにお喜びを申し上げたいと思います。

本日は、お時間を頂戴しまして、専門職大学院の状況についてお話しいたしたいと思います。結論を先にいうと、専門職大学院制度は、教育改革として一定の成功を取っており、今までのやり方を脱却した取組みが始まっています。現在、社会全体の大学院への期待は強くなっており、それを追い風に歩みを進めて頂きたいという気持ちを込めて、お話をさせて頂きたいと思います。

大学院在学者の推移

日本の大学院設置基準は、昭和49年の制定時点で既に、大学院の目的は、研究者養成と専門職業人の養成であると明確に規定していました。しかしながら、その二つの機能を十分に果たしておらず、十全なカリキュラムが準備されていないことが大きな課題として指摘されてきていました。そこで、職業人養成に特化した大学院を作ろうと、専門職大学院がスタートしました。グラフには、専門職大学院の学生数を示していますが、当初、非常に数が増えていましたが、最近は減っています。これは主に法科大学院の影響です。

大学院教育振興施策要綱

文部科学省の「大学院教育振興施策要綱」は、5年に1回、大学院の教育施策についてまとめたものですが、そこでは、日本の大学院は教育課程がきちんとした形で存在していないことを一番の問題としています。平成23年版でも、各大学院でどのような人材を養成するのかを定めて、それに必要な指導体制、カリキュラムを連携性・一貫性をもって作ることが掲げられています。

一方の専門職大学院では、この点、教育課程をしっかりと作って職業人養成に特化するという体制がきちんと実践されています。この点は、是非ご認識頂きたいと思います。

生産年齢人口の推移・予測

この動きをさらに進めていかなければならない要因として、人口問題があります。この問題が大学教育への期待にも非常に大きく影響していると感じています。

生産年齢人口が減り始めていることを、今、多くの企業の方々が実感されています。その中で、人材の高度化を大学に望む声が多様な分野から出てきています。以前は、企業自らOJTで育てるのが基本的なスタイルでしたが、グローバル化の中でコストを下げねばならず、人材養成の余裕もない状況で、大学に対する職業人養成が、社会の大きな期待になっているのです。

教育再生実行会議の提言

このような流れのなか、教育再生実行会議においても、大学での職業教育、人材養成が提言されています。その中では新しい高等教育機関の必要性までいわれていますが、私としては、既存の大学で職業人養成を今まで以上にきちんとやってほしいと思っています。また、社会の変化に対応した社

会人の学び直しも議論となっています。日本の大学全体で応えていかなければならないことで、専門職大学院はこの課題に率先して応えうる教育機関として、さらなる取組みを期待したいと思います。



社会人の学び直しについての意識

東京大学の大学経営・政策研究センターが大卒社員の方に調査したところ、「大学の修士課程に興味があるか」という質問について、半分の方が「機会があれば修学したい」、「関心はある」と回答しました。一方、大学院に行けない理由は、「費用が高すぎる」「時間がない」「職場の理解を得られない」「行ったところで処遇に反映されない」などがあげられています。こうした問題を少しでも解決できれば、社会人にもっと来て頂けるのではないかと思います。

日本の大学における課題

・グローバル化への対応

社会のあらゆる面で、グローバル化が追求されてきていますが、日本の大学や若者の状況には少し課題があると思っています。

日本から海外に留学する方は、2005年をピークに減っています。世界中で留学生が増えている中で、日本人だけが減っているという流れを変えなければなりません。そこで、「トビタテ!留学JAPAN」という取組みをしています。奨学金もあり、事前・事後の企業研修もあるので、是非、先生方も学生の皆さんにご紹介下さい。

また、専門職学位課程にいる留学生の方は非常に少ない状況です。これについてどのように対応するのかは、考えておくべきポイントの一つではないかと思います。

・地方大学を活用した雇用創出・若者定着

現在、総務省と文部科学省が連携して、地方大学を活用した地方の雇用創出・若者定着の取組みを始めようとしています。一つは奨学金を活用した地方定着です。都道府県単位で基金を作り、その県に就職することを条件に、奨学金の返済資金を基金が負担して学生の負担を減らします。また、これ以外にも地方の雇用創出・若者定着に資するような取組みについて文部科学省として応援しています。

おわりに

専門職大学院の取組みは大学の教育改革として非常に成果をあげていると考えています。今後、専門職大学院の教育課程や実践的な取組みを大学全体にぜひ広げていって頂きたいと期待しております。ご清聴どうもありがとうございました。

第二部 特別講演

国際対応に不可欠な会計専門職教育

中央大学大学院 経営戦略研究科教授 藤沼 亜起
Tsuquoki Fujinuma

私はいろいろな海外活動をやってきました。そこで、私の職業人としての歩みを簡単にお話ししたうえで、IFRSの現状と将来、IFACの組織と活動、国際対応に不可欠な会計専門職教育、世界に受け入れられる会計人材の育成、といったテーマでお話しさせていただければと思います。

My life in Accounting — 職業会計人としての歩み

大学卒業後働きはじめて、国際取引の監査担当になりましたが、英語に大変苦労しました。そこで会計士には英語の知識が必要だと思い、世界に挑戦しようと思いました。それから私の人生が変わり、今に至っています。IFAC(国際会計士連盟)で、理事・副会長となり、会長を2年半務めて、IFRSの改革を進めました。その後、日本公認会計士協会の会長を3年間務めてから、IFRS財団の仕事をはほぼ10年間引き受け、昨年の10月末に任期満了で退任しました。

IFRSの現状と未来に向かって

IFRS財団は2001年にできた組織で、それが2014年までに世界114か国、国連の加盟国は193か国といわれていますけれども、これだけ広がってきています。資本市場には単一の基準が大事だということがあったからこそ、ここまで伸びてきたわけです。

IFRS財団には評議員会の下に国際会計基準審議会(IASB)があり、その傘下に解釈指針委員会と諮問会議があり、いずれの組織にも日本から代表者が出ております。さらに、財団のモニタリング・ボードができましたが、現在のチェアマンは金融庁の国際審議官の河野さんが担当されており、日本の存在感は非常に高まっています。

国際対応に不可欠な会計専門職教育

①会計プロフェッションの課題

優秀な人材を確保してそれを育成・教育するのが一番の課題ではないかと思っています。特に、会計プロフェッションが魅力的な職業人として認知される必要があると思っています。ただし、試験制度や資格制度を変えるのはなかなか難しい問題です。この点、会計大学院との連携を強めることは重要だと思います。特に会計教育と国際人材の養成は会計大学院なら連携性がありますし、うまく立ち上げればと思います。

会計プロフェッションのその他の課題は、倫理や行動規範、特に独立性の問題です。監査とコンサルティング業務が両立するかどうかといった問題や、問題会社を引き受ける少数の会計士についての問題もあります。

次に自主規制と官規制のバランスの問題です。官では監査の品質をきちんと守るため、どうしてもプロセスを重視することになり、会計士は監査調査の作成に追われてしまうという問題があります。品質問題は官にすべてを任せるわけにはいきませんので、会計士が襟を正して品質強化に努めることが第一で、官は足りないところを指導する形が望ましいと思います。

②求められる教養・基礎能力

国際会計教育基準のフレームワークでは、会計職業専門家の要件に、専門知識、専門スキル、専門家としての価値観・倫理観及び心構えなどを挙げています。職業的専門家としての



様々なスキルの向上が求められますが、特に、一般教養の部分は再確認する必要があると思います。試験だけでこのような知識を得られるわけではないので、学校教育の中で強化しなければならないと思います。また日本では、誰でも公認会計士試験を受験できますが、最低限、学部修了レベルにあるかどうかを確かめて受験させることは必要だと思います。

世界に受け入れられる会計人材の育成

①会計プロフェッション人材の強みと弱み

会計プロフェッションは、独立の立場ではあるが、会社にとって大事な存在である。色々な会社に関与でき、知識と経験が得られ、国際業務に接する機会がある。様々な研修の場もあり、使命感や倫理観などの教育も受け、事務所でも議論できるところなどが強みです。

②グローバル環境への対応の遅れ

日本人の一般的傾向として、日本固有の社会への過剰適合があるのではないかと思います。それが変化への対応力を弱らせているのではないかと。国際基準を知らない、興味がない人たちが育つことのないよう、「ガラパゴス化」しないように頑張ってくださいと思っています。

③世界に受け入れられる会計人材の育成

私が大事だと思うのはパブリックインタレスト、「公益」を意識して責任感を持つことです。それには、一般教養に加え、専門知識やその周辺知識、自国のみならず外国の文化や歴史などに対する興味と理解が大切です。

また、国際化を生き抜くためには、特にコミュニケーションスキルが重要です。外国人との交流にあたって「藤沼の3F」というのがあります。フレンドリー、フランク、フェア。それに、外国人はジョークが好きなので“With Fun”を加えて結構広めています。

会計専門職大学院には、インテグリティ(信頼性)、公益擁護の姿勢、世界に通用する知識と前向きなビジョンを持って誠実な努力をする会計人の育成を期待したいです。

おわりにあたって

吉田松陰は「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし、故に、夢なき者に成功なし」と言いました。会計大学院から数多くのグローバル会計人材が誕生することを期待して、終わらせて頂きます。ありがとうございました。

第三部 パネル討論会 [会計大学院修了生討論会]

次代を担う会計大学院修了生の活躍の姿

八田 会計大学院協会は2005年に創立され、丸10年を終えようとしています。今日はこの10年の間に修了生として巣立った方々がどんな気持ちで大学院に入り、どういうことを学び、そして今、この会計大学院に対してどのような思いを抱いているのかを伺ってみたいと思います。それぞれに異なった環境で活躍している7名の皆様をお迎えすることになりました。質問項目は全部で6項目、それぞれの方々に対してあらかじめ伺っております。

会計大学院に入学した動機

八田 それでは、中村さんから自己紹介も兼ねて、よろしくお願ひします。

中村 青山学院大学会計大学院を修了しました中村義則と申します。全国農業協同組合中央会から派遣され、復職して現在に至っております。2001年に就職し、現在14年目です。

農協では、中央会による独自の外部監査制度が作られています。社会的な認知度が低く、監査の専門性に関する同等性などの確保を求められる一環で、農協監査士の中から公認会計士を育成することが組織の使命の一つでした。そこで、会計大学院に留学する制度を使い、入学し、学ばせて頂いて、会計士の試験に受かり、今に至っております。

八田 どうもありがとうございます。では次に北本さん、お願ひします。

北本 関西大学会計大学院修了生の北本です。公認会計士になりたいという意識で入学しました。

大学在学中に関西大学に会計大学院が設立されることになり、「高度な専門知識を身につけた公認会計士を世に輩出する使命」というプレゼンを聞いて、専門学校で学ぶよりも、専門的な知識を身につけて会計士として社会で活躍できれば、という思いで会計大学院に入学しました。もちろん、短答式試験の一部免除も一つのメリットでした。

八田 どうもありがとうございます。今日ご登壇頂いている方々のうち、公認会計士試験合格者が4名です。この制度ができたときに、公認会計士試験を非常に強く意識していましたが、入ってくる学生もそれに特化した学生がいたのではないのでしょうか。

それでは、3人目は越桐さん、よろしくお願ひします。

越桐 関西学院大学を修了しました越桐と申します。私は当時、5年以上の実務経験があったため1年半で修了できる制度を使って、1年半で修了させて頂きました。慶應義塾大学の商学部を卒業後、大手の製造業に勤務してきましたが、1995年に米国アトランタにある子会社に向向しました。その会社の下名より5歳ぐらい年上の米国人の経理部長(controller)が、非常に知識の幅が広いのを拝見して、そのときから、体系的・包括的に財務会計、管理会計を勉強したいと思っておりました。大企業の経理部門は狭い範囲で非常に深く実

務を行うため、自分で努力して勉強をしないと、幅広い会計知識が付き難いからです。その後、40歳のときに大阪に単身赴任機会もあり、同時期に関西学院の募集があり、入学させて頂きました。



八田 どうもありがとうございます。続きまして中崎さん、お願ひします。

中崎 熊本学園大学大学院会計専門職研究科、2014年3月修了、中崎敏弘と申します。この中で唯一税理士です。

私が入学した経緯は、資格の部分が一番大きいです。論文を書くのと税理士試験の免除を受けられるところが一番大きな動機でした。その前に専門学校で税理士試験の勉強をしていましたが、専門学校での受験だけの勉強は少ししんどいところがあり、入学を決めました。

八田 どうもありがとうございます。現時点で17の会計大学院がありますが、中身はだいぶ違います。私が当協会の理事長を拝命していたとき、中崎さんの熊本学園大学は、大半が税理士を目指す方々を養成していると伺いました。そもそも熊本地域にはクライアントが少ないため監査ができないから、地域に貢献し、会計に貢献するならば税理士の方が身近だという発想をもっている。それは一つの特殊性だと理解したことがありました。

それでは、続きまして大坪さん、お願ひします。

大坪 北海道大学大学院、2008年修了の大坪と申します。現在、日本銀行に勤めております。

私は、大学4年のときに公認会計士試験を受けて不合格となったため、卒業後は無職で受験生活をするかどうか迷いましたが、監査法人で働く以外の選択肢も検討したことから、大学院への進学を希望しました。

また、専門職大学院と研究者養成のための大学院を比較した場合、会計は実務と学問の二つが混ざり合う領域であることから、実務と学問をバランスよく学ぶことができる専門職大学院への進学を決めました。加えて、専門職大学院では社会人経験者と学ぶことができると考えたことから、様々な考え方に触れることで自分の視野を広げることができるのではないかの思いもあり専門職大学院への進学を決めました。

八田 どうもありがとうございます。

では、黒沢さん、よろしくお願ひします。

黒沢 明治大学専門職大学院会計専門職を2013年3月に修了致しました黒沢健吾と申します。現在は野村證券株式会社に勤めており

ます。

私は学部生時代から公認会計士を受験しておりましたが、合格しても思いどおりに就職ができる時代ではありませんでしたので、他の学生との差別化を図るために大学院に入学しました。大学院では、ただの詰め込みではなく、留学生とともに英語でディスカッションをする授業などもあり、非常に良かったです。

八田 どうもありがとうございます。それでは、最後に平井さん、お願いします。

平井 早稲田大学会計研究科を修了しました平井健之と申します。現在、監査法人に勤務しております。

私は、大学を卒業後、銀行に勤務しましたが、そこででき上がった財務諸表を見ていく中で会計に興味をもち始めました。それから、銀行の営業よりも税理士や会計士の業務に魅力を感じたのがきっかけで、思い切って勉強してみようと28歳のときに辞めて大学院に行こうと決めました。

学部生のときは体育会で、大学に全く行っていなかったの、理論を学びたいという希望が強くなり、思い切って入った次第です。

八田 どうもありがとうございます。日本ではおそらく、会計プロフェッションで代表的なのは公認会計士、そして税理士でしょう。皆さんはそこにターゲットを絞って入学されましたが、越桐さんのように、実務の中で、いわゆるスペシャリストよりももう少し視野の広いゼネラリスト的なアカウンティング・マインドを持ちたいというご意向も非常に重要性を感じております。

会計大学院で学んでよかったこと

八田 会計大学院で学んでよかったことを聞いてみたいと思います。では、平井さんからお願いします。

平井 4年間勤めて積み上げたものを全部授業料に使って、日々の生活費は奨学金や大学院中に結婚をした妻に支えてもらう状態でしたが、それ以上のものがありました。実務で会計に携わる仕事をしていたのですが、理論的な裏付けがついてきて、大学院の授業は非常に楽しかったです。基礎的な講座も実務家の先生の講座も全部、この先こういう会計の仕事に就くというイメージをもって学べたことは非常に良かったです。

実際に今、監査法人で会計監査の仕事をしていますが、非常に良かったと感じています。

八田 大学院で学ぶ場合、それもすでに社会人の場合には、コストは自分で負担しなければならないと思われ。ただ、自らコストを負担する覚悟もないと、単に無償での教育受益者という立場では絶対にもならないと思います。つまり、本気を見せないと周りも本気にならないわけです。平井さんの場合、その間に結婚したのは少し甘いような気もしますが……。 (笑い)

それはさておき、黒沢さん、どうですか。

黒沢 知識の面はもちろんですが、私は、人との出会いが非常に良かったと思っています。学部と違って、教授との距離も非常に近いですし、OBの方との交流も非常にたくさんありました。

そのなかで、会計を利用して色々なところで活躍している先輩や先生方にお会いし、金融機関で会計を生かしている方にも出会いまして、私も金融機関で働くことになりました。そういう人との出会いが会計大学院に所属してよかったところだと思っています。

八田 全くおっしゃるとおりです。特に大学院の場合、学生数も多くないために教育現場の教員との距離も非常に近い。そして色々な

バックグラウンドをもった方が入ってきますから。それでは大坪さん、どうですか。

大坪 大学院では、多様なバックグラウンドを持つ方々と一緒に勉強をしたり、実務家の先生の授業を受けたりと様々な経験をする事ができました。また、北海道大学は総合大学なので、別の分野を勉強している方々との交流の機会も多く、そうした経験をしながら自分の将来を考える時間を持てたところがよかったと思います。

このほか、北海道大学の会計大学院は定員が20人の小規模な大学院ですが、クラスメート同士の仲がよく、助け合いながら勉強できたことは、とてもよかったと思っています。

八田 確かに、北海道大学の1学年の定員は20名、そして、今も変わっていないならば東北大学は40名です。20名はあまりにも贅沢すぎる環境で、それは納税者である我々が負担しているわけですから、しっかりと返して頂きたいと思います。

中崎さん、熊本学園はどうですか。

中崎 学生同士あるいは学生と先生との議論を通して、考え方のベースを身につけることができ、根本的なところから考える訓練の場になったと思います。それは今の私の仕事においても非常に大きな財産になっております。

八田 専門職大学院の教育の使命の一つとして、「覚える会計から考える会計へ」と転換を図ることが私たちの役割だと思っていますので、そういう教育効果が出たとしたら非常に羨ましい気がします。

では、越桐さん、社会人として入学されてどうですか。

越桐 当時扶養家族もいる40歳であり、決して安いとはいえない学費を自分で負担し、自分に投資したということもあり、絶対回収してやろうという意欲で勉強していました。ただし、資格試験合格を目指していたわけではないので、半分ビジネススクールで学ぶように勉強を楽しんだと思っています。財務会計、管理会計を包括的に勉強できたことは非常に良かったです。その後、博士課程に進学したのですが、1年目で勤務先より中国北京駐在の辞令が出たので、博士課程は遺憾ながら1年で終了したのですが、修士と博士と非常に良いコースと機会を提供頂けたと思っています。

修了して大分時間が経過しますが、幅広い世代の方々とつきあえたことも私にとっては非常によい経験となりました。

八田 どうもありがとうございます。先ほど来、越桐さんは自分が年寄りのような表現を使いますが、まだまだ時間が長くありますので、是非頑張ってください。

では、関西大学の北本さん、お願いします。

北本 会計の専門書を深く読む機会が与えられたことや、会計を学術的に深く知ることでの知的好奇心がとても刺激されて、より勉強しようという気持ちに本当になれたことがよかったことです。

自分でレポートを書いたり、発表する時は厳しかったです。会計学を深く読み込んでいたので、会計が面白くなりました。会計大学院は会計の面白さを気づかせてくれたと思っています。

八田 どうもありがとうございます。

専門職大学院の仕組みの前提には、研究者教員と実務家教員のコラボレーションがあり、文部科学省の認可には3分の1以上の実務家専任教員が必要となります。

学生からアンケートをとると例外なく、実践的な内容の講義やトレーニングないしはインターンシップなど実務的な場面への参画が、非常に高い評価となっています。

昨日の日経新聞ですが、職業教育により人材を磨こうと政府も動

き始めようとしています。日本には初等・中等・高等教育において全くもって職業教育がないことが日本の産業力を弱くしている原因の一つではないかというわけです。

これは、我々の問題意識からすれば、20年以上遅れているわけですし、もう少し機動性のある支援を講じて頂きたいと思います。

では、最後に中村さん、お願いします。

中村 会計大学院に入った当時は国際会計や内部統制の議論のまっ只中で、その研究をされている先生方のお話を生で聞けるのは、専門学校にはない非常に代えがたい価値のあることだと思っていました。また、修了後も勉強できる環境があるのは会計大学院に入ったからだろうと実感しています。

それから、私は、会社から学費を全額負担して頂き、勉強させて頂きました。それによるプレッシャーから、中身の濃い学生生活を送ることができたと思っています。

八田 確かに、私どもの大学でも、国内留学といった制度を利用して学生生活を送る方や修了した方がおりますが、ほぼ全員、当初の目的を達成されています。コストはある程度自分で負担する厳しい環境においた方が本当は勉強ができるような気がします。

会計大学院修了後の進路と現在の仕事の内容

八田 では話題を修了後の進路に変えてみたいと思います。

まず、大学院を出て初めて就職した北本さん、今の職業にどのように就いたのか、そして今どういう夢をもっているのか、よろしくをお願いします。

北本 私は2009年3月に修了し、その年の短答式試験は合格しましたが、論文式試験は2011年に合格しました。修了後から専門学校に通って、勉強をしていましたが、資格をとっても監査法人に入れるかどうか分からない状況だといわれていましたので、論文式試験の後すぐに就職活動をしていました。その中である会社から内定が出て、その後会計士試験に合格したのですが、「経理は間に合っているから」と言われ、内定を辞退し、また就職活動が始まりました。

その後、UCCホールディングスから内定を頂いて、経理部の仕事をさせて頂き、今はIFRS導入の専任メンバーとして、尽力しているところです。

八田 ありがとうございます。試験の準備ということで再び専門学校で勉強されましたが、気持ちの切り替えはどのようにしてましたか。

北本 年齢も25を超えていて、複雑な思いもありましたが、公認会計士試験に受からないと始まらない、受かるには受験勉強をやり直すしかない。そして、会計大学院だと計算科目の受験テクニックが少し不足しているのではないかと資格学校で勉強しました。

八田 実際のペーパーテストにおいて、会計大学院に所属する学生が一番の弱点は計算力だといわれています。ただ、昔と比べて、速さだけを要求するような計算問題は減っているので、大分状況も変わったようには思います。では、次に大坪さん、お願いします。

大坪 私は、2007年11月に公認会計士試験に合格し、翌4月から日本銀行に入行しました。日本銀行には、会計の専門家としてではなく、総合職として入行したため、他分野を学んできた同期と同じく、様々な業務に従事してきました。

例えば、金融機関のリスク管理体制等をチェックする実地考査やその考査方針の策定に携わったほか、日本の金融システムの調査・分析を行う部署や金融関連の会計に関する基礎研究を行う部署等を



経験させて頂きました。

八田 日本を背負う高度な業務に関わっておられます。ぜひ頑張ってください。

会計大学院を修了したことで優位になったと考えられる点

八田 では中村さんから、仕事の内容も絡めて、大学院で学んだことや習得したことで、現在に至るまでに、どんなプラスの側面があったのかを教えてください。

中村 試験勉強だけでなく、色々な理論的なところを学ぶことができました。

監査制度の歴史や会計のホットな議論、IFRSの議論などをよく理解できたことが、監査の本部部門、管理機能を担ったときにプラスとなりました。現在、農協法改正などの制度対応にあたって、会計大学院で学んだ監査の歴史、諸外国はどうかという知識をもって議論に参画できていることは非常に優位性があります。

八田 どうもありがとうございます。

それでは越桐さん、現業で重要な職務に就きつつ、博士後期課程まで進学され、自身の知識欲や好奇心を高められたことが、今の立場や状況でどんな意味を持ったのでしょうか。

越桐 処遇とか何か得るものがあると言われると、私自身はあまりないというのが正直なところですが、勤務先の回覧資料あるいは社内の勉強資料といったものを、関心をもって深く読めるようになったところは非常に役に立っています。博士課程では管理会計の原価企画を専門として研究させて頂き、1年間という短期間でしたが、製造業での自分の職務内容に非常に役立ったと思います。

働きながらの大学院への通学はなかなか難しいですが、定年まで時間がありますので、是非とも再度勉強したいと思います。ともすると実務だけで理論がよく分からない状況に陥りがちなので、社会人としての自分の再教育(自己啓発)を、継続的にやっていきたいと思っています。

八田 どうもありがとうございます。それでは中崎さん。お父様の税理士事務所で、敏弘さんがボスになったときの事務所と今の事務所とで何か変わることがありますか。

中崎 難しい質問ですが、私の父の税理士事務所は、お客様も小さい零細企業ばかりで、IFRSなどは全然関係ありません。その中で、ある程度の会社では考えられない会計の処理などが出て、当てはめべき基準を考えなければならなくなります。そんなとき、私の父は経験に当てはめて適用していることが多いのですが、私は父よりは、基準をよく理解しているので、適用しなければならぬ基準の判断をより高いレベルでできるようになったのではないかと考えています。

そんなところで今の事務所との差別化を図りたい。社長に引っ張

られないで、より一般的な会計の基準を適用できるやり方をしたいと思っています。

八田 今、税理士業界は極めて高齢化が著しく、後継者の問題もあります。また、業務内容も私の学生時代は記帳代行がベースでしたが、今は3,000円から5,000円ぐらいの簡易な会計ソフトで完全に帳簿作成ができますから、クライアントサービスの内容が変質しています。

こうした問題に、会計大学院で学んだことやそこで得た知見をうまく発揮して、是非頑張ってくださいませ。

最後に、平井さんは会計大学院に入る前の職業人・社会人としての立場と、今の監査法人で、状況の変化はどうでしょうか。

平井 前職のときは、銀行の看板を背負って、最終的には銀行が…、という意識があったと思います。それに気づいたのは、監査法人で働き始めて、発言したことが会社の議事録に残るのを見たときで、発言に責任を持たなければいけないと感じました。専門家としての責任の重大さを日々感じながら業務をしている点が、前職と違うと強く感じております。

八田 ありがとうございます。おそらくプロフェッションとしての喜び、裏を返せば社会的な責任の大きさを実感されていると思いますが、最初から監査法人に入っていたらその喜びは分からなかったままではないでしょうか。

平井 そうですね。監査法人に行ったときに「内部統制」「内部統制」と騒いでいたのですが、金融機関で働いていた経験からすると、そんなことは当たり前のことでした。ただ、銀行より普通の事業会社はそこが脆弱であったということで、業務としてもそういうニーズや要請があり、責任が重大だと感じました。

会計大学院をよりよくするために必要と思うこと

八田 最後に、会計大学院をよりよくしたい、あるいは参加して頂く人々を多く迎え入れたい、という気持ちがあります。

丸々10年間関わって、今私たちがやっている教育は、少なくとも学部教育や研究者養成の大学院教育では無理だろうと実感しておりますが、それにしてもあまりにも入学を希望する学生の分母が少ない。是非その辺のメッセージを出して頂きたいと思います。では、中村さんからお願いします。

中村 会計大学院の授業の中で先生方の最先端の議論が学べる環境は代えがたいものですが、サービスを提供するターゲットが明確でない中で、会計大学院はスタートしたのではないのでしょうか。

社会の方が再教育として授業を受けやすい環境になるように、できるだけ夜間に授業をシフトし、必修科目の範囲を広くして、社会人にとって興味のある授業を受講しやすい会計大学院にすることで、社会に必要とされる機関になるだろうと思います。

八田 どうもありがとうございます。では、北本さん、お願いします。

北本 私は、知識ゼロから会計大学院で会計の勉強をして会計士になったのですが、その後、もう一度会計大学院に入れば、より質の高い理解につながるのではないかと思うようになりました。

今、私と同じような公認会計士の若手からも、次のキャリアパスをどうしようかという話をよく耳にします。そこで、試験に受かって一通りの知識がある人達を入学させて、本当に高等な教育を受けさせて社会に返す、会計業界のキャリアパスの一つとして会計大学院の将来が描けたら面白いのではないのでしょうか。

八田 ありがとうございます。では、越桐さん、お願いします。

越桐 私は試験を受けていないのであまり説得力はないかもしれませんが、公認会計士試験の合格者数を増やすことが重要ではないかと感じます。

会計大学院在学者及び修了者の合格者数は大体15%弱ぐらいで、学部卒の方が大半ですので、そこかなという気がしております。

八田 では、中崎さん、お願いします。

中崎 会計の基準でも、税法でも、現実に対応していくには議論が必要で、議論の中から色々な基準とか法律が生まれてくると思いますので、議論をする場をより一層増やして頂きたいです。

八田 ありがとうございます。では、大坪さん、お願いします。

大坪 会計士は国際的に活躍する機会も多いと思いますので、その辺りをケアする「語学の必修化」のような仕組みを作ったらよいと思います。

八田 ありがとうございます。では、黒沢さん。

黒沢 私の年代では、雇用について不安を抱えている方が非常に多かったのですが、修了後、就職に役に立ったと思ってもらえる大学院が一番求められていると思います。

先生方もすばらしく、カリキュラムもすばらしいのですが、一方で、まだ社会で認められていないところが問題だと思っています。認められるためには、結局、修了生が社会で活躍するしかないと思っていますので、私自身も含めて、活躍できるように頑張ろうと思っています。

八田 すでにまとめてもらったような感じですが、平井さん、お願いします。

平井 私はカリキュラムに十分満足していましたが、実際に受ける側で、学部から来る方などは、すごくいいことをやっているとなかなか気づかないようでした。

実際に修了した方々が学生たちに対して、今が非常に重要で、大変貴重な時間だということ認識してもらおうシンポジウムなども必要ではないかと思っています。

八田 どうもありがとうございます。

この3月で丸10年を終える我々会計専門職大学院、あつという間の10年であり、また苦難の10年間でもありました。

私たちが学んでいる国際会計の領域には、「国際会計の祖」と呼ばれるワシントン大学のゲルハルト・ミュラーという有名な先生がおられます。先生は1950年代に農学部を出てから、当時始まったばかりの経営大学院、今でいうMBAに進学して、ビジネスの重要性、そして、そのコアにある会計の重要性を知って会計学研究者、そして国際会計のトップになるわけです。その方が、確かにアメリカでも1980年代に入ってMBAも人気が出て評価もされたが、当初は全く知られていなかった、時代は変わるのだとおっしゃいました。我々の会計専門職大学院はまだ10年ですから、あと15年頑張らなければだめかな、制度はなかなか動かないのかな、という気もいたします。ただ、今日、7名の優秀な修了生をお迎えして、次につながる夢をいただきました。

私たちも、特別講演で藤沼先生がおっしゃったように、公共の利益に資するような役割をこれからも担っていきたいと思いますので、是非ご支援をお願いして、今日のシンポジウムを終わらせて頂きたいと思っています。

会計大学院協会活動状況 (2014.12~2015.4)

理事・委員会議

2014年12月23日 第4回 理事・委員会議(会場:東北大学 東京分室)

2015年 3月22日 第5回 理事・委員会議(会場:東北大学 東京分室)

シンポジウム・セミナー等

2014年12月20日 第9回 公開シンポジウム(青山学院大学)

2015年 1月31日 会計大学院協会創立10周年記念 公開シンポジウム「国際対応に不可欠な会計専門職教育」

インターンシップ

2015年2月16日~2月27日 有限責任監査法人トーマツ、有限責任あずさ監査法人、新日本有限責任監査法人、あらた監査法人へ会計大学院生を派遣。

渉外事項

日本公認会計士協会、公認会計士・監査審査会、金融庁および文部科学省と必要に応じて協議

その他

2014年12月4日 事務担当者説明会(会場:青山学院大学)

2014年公認会計士試験合格状況調査結果

2014年度在学生	合格者数	論文式科目別合格者数
2年生	37	3
1年生	9	0
修了生	合格者数	論文式科目別合格者数
2013年度修了生	26	8
2012年度以前修了生	69	9

※会計大学院によっては、一部の項目について未集計のものがありません。

会員校

- ・ 青山学院大学 (大学院会計プロフェッション研究科)
- ・ 大原大学院大学 (大学院会計研究科会計監査専攻)
- ・ 関西大学 (大学院会計研究科会計人養成専攻)
- ・ 関西学院大学 (専門職大学院経営戦略研究科会計専門職専攻)
- ・ 熊本学園大学 (専門職大学院会計専門職研究科アカウンティング専攻)
- ・ 甲南大学 (大学院社会科学研究科会計専門職専攻)
- ・ 千葉商科大学 (大学院会計ファイナンス研究科)
- ・ 中央大学 (専門職大学院国際会計研究科)
- ・ 東北大学 (大学院経済学研究科会計専門職専攻)
- ・ 兵庫県立大学 (大学院会計研究科会計専門職専攻)
- ・ 法政大学 (大学院イノベーション・マネジメント研究科アカウンティング専攻)
- ・ 北海道大学 (大学院経済学研究科会計情報専攻)
- ・ 明治大学 (専門職大学院会計専門職研究科)
- ・ 立命館大学 (大学院経営管理研究科)
- ・ LEC大学 (LEC東京リーガルマインド大学大学院高度専門職研究科会計専門職専攻)
- ・ 早稲田大学 (大学院会計研究科)

準会員校

- ・ 慶応義塾大学

賛助会員

- ・ 日本公認会計士協会
- ・ 日本税理士会連合会

2015年5月現在

会計大学院協会ニュース No.20 [2015年5月23日発行]

【理事長校】 東北大学大学院経済学研究科会計専門職専攻 〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1

【会計大学院協会事務局】 青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科内 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25